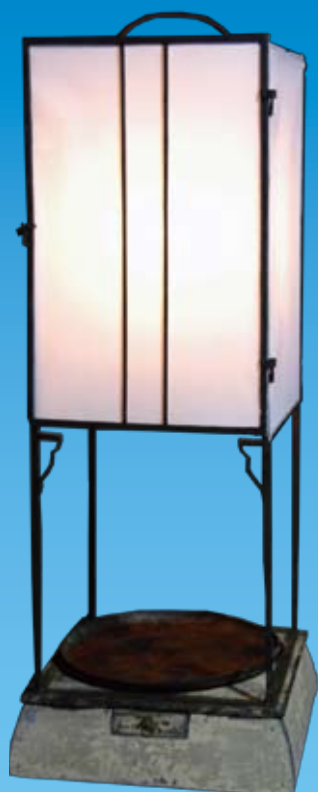


豊田資料館 郷土資料館 だより

No. 85

Toyota City Museum
Of
Local History



旧鈴木家住宅に伝わった「あかりの道具」
(左「有明行燈」、右「角行燈」)

目次

・祝 重要文化財指定 旧鈴木家住宅の屋敷構えの変遷	2
・民具調査だより-12 企画展 重要文化財 旧鈴木家住宅 収蔵品展 あかりの道具	3
・平成 25 年度発見館企画展 「われらの飛行機・ ^{こまち} 芋母号～衣ヶ原飛行場とその時代～」	4
・近代化遺産探訪 台地を潤す用水～近代化遺産の今～	5
・平成 25 年度特別展準備レポート1 足助の矢師	6
・資料紹介 子守明神祭礼図～江戸時代の芋母祭りを今に伝える～	7
・文化財シリーズ 85 国の特別天然記念物 カモシカ	8
・資料館 NEWS	8



国指定重要文化財旧鈴木家住宅

旧鈴木家住宅の屋敷構えの変遷

豊田市の足助の町並み（豊田市足助伝統的建造物群保存地区）のほぼ中央に、足助を代表する商家の町家があります。地元からは、屋号である「紙屋」と呼ばれている旧鈴木家住宅です。約4,000㎡ある扇状の敷地に16棟の建物が建ち並んでいます。

元々は、屋号の示すとおり紙を扱っていたようですが、漆など山間部の立地を生かした物品や、土地経営や新田開発などで、江戸時代後期に財を成した商家です。家業が隆盛したことで、敷地を買い増し、建物を建てたことで現在のような屋敷構えになりました。

足助では、安永4年(1775)の大火によって、町のほとんどが焼けたと伝えられています。足助の町並みの中に大火以前の建造とされる町家はなく、大火の翌年の安永5年(1776)に建造された旧鈴木家住宅は、足助の町並みの中では最も古い町家のひとつです。

足助の町並みのなかで最大級の敷地をもち、主屋は足助の町並みのなかで最古であり、また近世から近代にかけて建てられた建物が良好に残っていることが評価され、平成25年(2013)8月に重要文化財に指定されました。



写真1 敷地内に16棟の建物が並ぶ旧鈴木家住宅

建物を価値付けする上で重要になるのが、建物の建った年代が分かることです。

旧鈴木家住宅については、平成23年(2011)から調査を実施し、家相の検討する目的で作成されたと考えられる絵図などの史料と、現場に残る棟札などの証拠を分析した結果、広大な敷地にどのような建物が建ち、更新されていったかが分かってきました。

ここでは調査成果のごく一部をご紹介します。

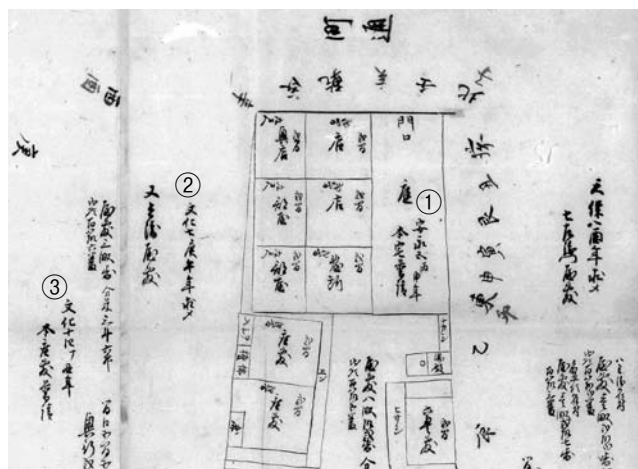


写真2 旧鈴木家住宅絵図 [安永7年(1778)ごろ]

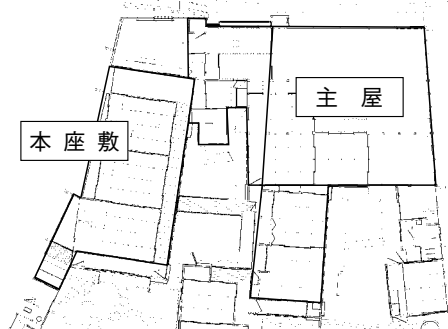


図1 旧鈴木家住宅主屋まわりの現状

旧鈴木家住宅の屋敷構えを現す最も古い絵図には、安永期から文化文政期にかけて(1776～1828年ごろ)の屋敷構えの変遷がわかります。絵図には、安永5年(1776)の主屋の建築が記されています(写真2①に「安永五丙申年 本宅普請」と記載)。他にも文化7年(1810)に西側の隣地を購入し(写真2②に「文化七庚午年求メ」と記載)、文化14年(1817)に本座敷を建築(写真2③に「文化十四丁丑年本座敷普請」と記載)したことなどが分かっています。なお、本座敷については、建物の小屋束に「文化十四歳五月吉日建立」という墨書があり、絵図の記載を裏付けています。これら座敷の整備などは、鈴木家が文化3年(1806)に旗本の本多家の年貢仕送り人に指名され、同5年(1808)に「家中並」となったことにより、家格の上昇にあわせ必要になったと考えられています。

このように旧鈴木家住宅の屋敷地の変遷を示す史料価値が認められ、絵図8枚と冊子2冊も重要文化財の附として指定されています。(松川 智一)

企画展 重要文化財 旧鈴木家住宅収蔵品展 あかりの道具

はじめに

旧鈴木家住宅における民具の登録件数は4,016点で、その内発火具を含む“あかり”に関連する道具は98点になります。全体件数の中での割合は少ないですが、往時の暮らしぶりを彷彿させる道具を見ることができます。今回の展示は電燈を使う前までの、あかりに関する諸道具をもらさず公開します。

さまざまな燈火

現在の私たちが使っている電気のあかり以前では、燃料（エネルギー源）として、草木・動植物の油・蠟燭・石油などを用いるあかりの道具がありました。人々は入手可能な燃料を使い、個々の暮らしぶりと相談しながら、様々な工夫をして暮らしに沿ったあかりの道具を発達させ、闇と向かい合ってきました。

屋内に設けられた、囲炉裏以前の地炉は煮炊き用、暖房、あかりとして使われましたが、暑い夏のあかりとしては不適でした。そこで、炉で焚いた木々の中から、長い時間あかるく燃える樹脂の多い松の根に目をつけ、これを細かに割り、石や土器の台の上で燃し、あかりとしました。これがヒデバチとかマツダイイシと呼ばれる物で、その後、四角の鉄板に足を付けたアカシダイとかマツトウガイと呼ばれる道具が生まれました。また、アカシダイなどより前に用いられていたと言われているのが、獣脂や魚油からやがて植物性の灯油へと変化した、油を燃料とするヒョウソク、行燈、燈籠、燈台などと呼ばれている多様なあかりの道具達です。

●色々な行燈



■有明行燈
W268 H705 D268



■角行燈（名古屋行燈）
W315 H830 D315



■座敷行燈
W270 H282 D270



さらに、仏教の献灯に用いられた蜜燭から始まったとされる蠟燭を光源とする、燭台、手燭、提燈、龕燈など生活の変化に合わせて工夫された、多様な様相をみせる道具が現れてきました。

最後に、明治の十年代になって急速に日本全国に普及したのが石油洋燈と呼ばれたランプ。台ランプ（座敷ランプ）、吊りランプ、カンテラなど、夜なべ仕事などの日常生活のみならず、ランプは産業分野でも使われ始めました。従来のあかりに比べ、驚異的なあかりさを手に入れた訳ですが、代わりに無くしてしまったモノもあったように思えてなりません…。

旧鈴木家住宅の灯燭具

灯燭具は、茶室や露地で用いる、あかりの道具です。遺されていた灯燭具は、短繫、座敷行燈、露地行燈、足元行燈、木燈籠、木掛燈籠、手燭などであり、これらを使用するための、小道具と称される油皿・搔立て・油次・灯心・下皿などもいくつか登録することが出来ました。

非日常の空間で用いられた、独特な意匠をそなえた灯燭具を見ていただく良い機会だと思います。

（東海民具学会 岡本大三郎）

企画展 重要文化財 旧鈴木家住宅収蔵品展

「あかりの道具」

会 期：平成25年10月29日（火）～12月15日（日）
開館時間：9時～17時
会 場：豊田市郷土資料館 第二展示室
休 館 日：月曜日
観 覧 料：無料

「われらの飛行機・^{ころも}拳母号～衣ヶ原飛行場とその時代～」

豊田市にあった飛行場といえば伊保原飛行場を思い浮かべる方も多いかと思いますが、衣ヶ原（現・トヨタ自動車株式会社 元町工場）に民間飛行場があったことはあまり知られていません。

農地としては不向きなこの衣ヶ原を、水はけのよい飛行場適地として見出したのは、名古屋市在住の起業家で、飛行士でもある熊崎惣二郎（1889～1964）でした。

熊崎は、飛行場を建設して満州などの航路を拓き、「飛行町」を建設しようと考え、世界恐慌下の昭和5年（1930）12月、拳母・^{つちはし}土橋間の山林11万坪の土地を購入すると、拳母町内から人夫を雇って土地を整地し、草原の飛行場をつくりました。翌年2月18日に行われた飛行場地鎮祭では、名古屋飛行学校の曲技飛行などもあり、総人口1万3千人ほどの拳母町に、5万人もの人々が押し寄せたと、伝えられています。



昭和6年（1931）衣ヶ原飛行場地鎮祭 個人提供（※1）

飛行場建設は、経済不況の長期化で中断の危機もありましたが、中村寿一拳母町長の協力もあり、昭和10年（1935）9月、^{ていしん}逓信省航空局から正式に認可がおりました。

拳母町では飛行場の開場や、昭和11年（1936）8月の小泉喜久男飛行士所有のサルムソン2A2の飛来とともに、町有の飛行機を持ちたいという声が上がりはじめました。そこで、中村寿一町長らが発起人となって町民から寄付を募り、昭和12年（1937）に一機の飛行機を購入しました。これが全国でもめずらしい町有飛行機「拳母号」です。「飛行機拳母号購入寄付者芳名録綴」には、地元有力者から芸妓まで幅広い層の町民が名を

連ねており、人々の関心の高さが分かります。



昭和12年（1937）4月18日 拳母第一尋常小学校遠足

拳母号は浜松飛行機製作所から購入した中古の飛行機（アプロ504K）で、輸送費、小泉飛行士による組立費を含めて1,500円（現在の約101万円）（※2）ほどで購入されました。小さな町が飛行機を所有するということは、とても誇らしいことだったそうです。

拳母号は、小学校の見学会や航空ショー、体験飛行などで、航空思想（※3）の普及に利用されました。また、防空演習にも多く利用されました。

企画展「われらの飛行機・拳母号」では、衣ヶ原飛行場の地鎮祭を見てパイロットを志し、昭和12～13年（1937～1938）に、拳母号整備に携わっていた山田金正氏への聞き取り調査を主軸として、拳母号模型、空冷回転星型9気筒エンジン（かかみがはら航空宇宙科学博物館蔵）などを展示し、衣ヶ原飛行場と町有飛行機「拳母号」について紹介しています。（小西 恭子）

（※1） 企画展の開催期間中、発見館で衣ヶ原飛行場地鎮祭の映像（熊崎惣一郎蔵）を放映中

（※2） 「戦前基準企業物価指数」で、昭和11年の指数と平成18年の指数を比較した数字です。

（※3） 飛行機の利活用を促す考え・思想

発見館企画展 開催中！

「われらの飛行機・拳母号～衣ヶ原飛行場とその時代～」

場所：豊田市近代の産業とくらし発見館（喜多町4-45）

期間：平成25年7月13日（土）～10月20日（日）

休館：毎週月曜日（祝日は開館）

時間：9時～17時

水で潤う田園風景を、市内各地で見ることができる豊田市。かつて私は、そうした田園風景をあたかもその地域の原風景と思い込んでいました。しかし、今の水で潤った風景は、先人たちの知恵と情熱、苦労や苦悩の賜物だったのです。

ここでは、明治期に豊田市域を潤した「明治用水」と「枝下用水」の二つの用水の「今」を、近代化遺産という観点からご紹介したいと思います。

明治用水

明治用水は、矢作川の水を豊田市水源町の取水口から取り入れ、豊田・安城・岡崎・刈谷・碧南・西尾・高浜市域に供給する広域の用水です。明治12年(1878)に用水の開削が着手され、明治18年(1885)に主な水路系統が完成しました。明治33年(1900)には、水路用の堤によって流れが遮られる鴛鴨町の家下川を通すために葭池樋門という暗渠が造られました。明治34年(1901)には、水の取り入れ口として頭首工(今も残る旧頭首工)が設置され、明治41年(1908)には、堰堤設置により通行できなくなった船や筏を通すために船通し閘門が造られました。この船通し閘門を船が通過するのに約15分間かかったと言われています。葭池樋門・旧頭首工・船通し閘門はサバ土と石灰を水で混ぜ合わせてたたき上げる人造石工法で造られました。この工法は非常に耐水性が強く、コンクリート工法が普及する以前(明治・大正)には多く利用されました。

現頭首工の完成に伴い、旧頭首工と船通し閘門は昭和41年(1966)に取り壊されることとなりましたが、人造石工法で造られていたため、頑強で容易に壊れず、一部は当時の姿を今に残しています。遺構付近には、今では地元の方々によって看板が立てられたり、ベンチが設置されたりと見学のための整備が進められ、昔の姿を偲ぶことができます。

葭池樋門は、明治期に人造石工法で造られた樋門のうち現役のものでは唯一であり、近代化を支えた用水関連施設として大変価値のある土木建築です。しかし、この葭池樋門は矢作川中流圏域河川整備計画の工事に伴い、姿を消してしまうかもしれません。治水等の観点から、住民の安全を守るための河川整備であり、やむを得ないことだと思いますが、先人たちの用水への情熱や土木建築物としての技術を考えると、残念な気持ちになります。



写真 葭池樋門
(鴛鴨町)

枝下用水

枝下用水は猿投・上郷・高岡などに農業用水を流す用水路です。明治17年(1884)に開削が始まり、度重なる洪水や修理費の増大などの困難がありながら、明治23年(1890)に西枝下から挙母を通して矢作川へ戻る幹線水路と、挙母から鴛鴨方面へ延びる東用水が完成しました。明治27年(1894)には旧頭首工と第二樋門が人造石工法で造られ、西用水が完成しました。

枝下用水の建設費は、開削による工事費よりも修理費の方が高かったと言われています。それは、用水が山中を曲がりながら開削されていたことなどが原因でした。雨が降ると用水の水が増水し、用水路が壊れ、修理を重ねながら、工事を進めていったのです。こうした困難な工事を近江商人の西澤真蔵が引き受け、私財を投げ打ってまで、その完成に尽力しました。死後、西澤真蔵はその功績が讃えられ、地元の神社では水神として祭られることとなりました。

幾多の困難を経て完成した枝下用水でしたが、昭和4年(1929)、越戸ダムの完成に伴い頭首工の位置が下流に変更されました。枝下町にある(株)太啓の東側に広がる雑木林を進んでいくと、役目を終えた旧頭首工が今もひっそりと残されています。旧頭首工までの道のりは、地元の方によって草刈や階段、小橋が設置されており、安全に近代化遺産を探訪することができます。近代化遺産を地元住民が主体となって保存・活用を図っている事例の一つであり、今後も末永く続いていくことを期待します。

(井上 直己)

足助の矢師

日本の伝統的な武器の一つに、弓矢があります。日本列島において、弓矢の出現は古く縄文時代に遡ります。長い歳月を経て、弓矢の形態には改良が重ねられ、戦国時代末頃には完成域に達していたといわれます。しかし、江戸時代以降に戦が途絶えていくと、武術としての弓術は衰退の一途をたどっていきました。弓を射ることは狩猟や武術としての性格がうすれ、心身鍛錬が目的となっていきましたが、現代ではスポーツとして弓道が親しまれています。また、「的を射る」「こんな筈じゃなかった」等、弓文化によって生まれた言葉も生活の中に浸透しています。特に、愛知県は全国的に弓道をたしなむ方が多い地域です。郷土資料館では、平成26年(2014)1月から豊田市に関わる弓文化に焦点をあてた特別展を企画しています。本紙以降、準備状況を報告していきます。

今回は、足助の矢師について調査中の内容を紹介합니다。弓道の道具を製作する専門技術をもつ職人がいることをご存知でしょうか。弓を作る「弓師」、矢を作る「矢師」、弓矢を射るときに手につける「^{ゆがけ}檠^{かけし}」をつくる「^{かけし}檠師」などです。足助町には、伝統的な竹矢作りの技術を受け継いでいる「矢師」がいます。

旧飯田街道に沿って、馬頭観音を過ぎ、町並みが始まる入口付近に「いろは竹工所」があります。



写真1 「いろは竹工所」

昨年2月にお亡くなりになられた「いろは竹工所」の三代目鈴木武夫さんは、竹矢製作技法の所持者として、豊田市無形文化財に指定されていました。また、平成17年(2005)に開催された日本国際博覧会「愛・地球博」の会場では、日本の職人100人の中の一人として等身大の写真パネルとともに紹介されました。

鈴木家が竹矢作りを始められたのは、武夫さんの祖父にあたる、庄五郎さんからです。庄五郎さんは明治14年(1881)に現在の岡崎市に生まれました。その足

跡は、調査中の部分もありますが、のちに足助に拠点を移し、各地の弓道大会に参加して、弓の名手として知られていた方だそうです。庄五郎さんに頼めば当たる矢が手に入ると思う人々からの注文で、元々の飲食店と宿屋の家業に加え、竹矢作りを始められたそうです。その後、庄五郎さんの息子の茂さんの代に「いろは竹工所」を創業しました。茂さんも弓の名手として活躍された方でした。その後、茂さんの息子武夫さん、その息子淳司さんへと代々の当主にのみ竹矢作りの伝統的技術が受け継がれていきました。



写真2 竹矢製作「火入れ」作業中の武夫さん

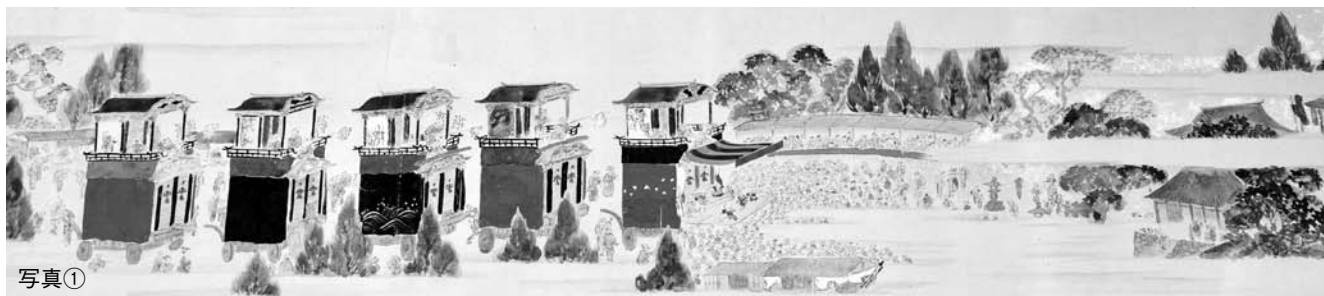
伝統的な竹矢の製作はどのように行われるのでしょうか。その概要を紹介します。まず、弓矢に適した矢竹を育てることから始まります。矢に適した年数、長さ、太さ、重さを見極めて伐採しますが、その伐り方、干し方など様々な要素への配慮が必要です。伐採して干した後は矢竹の節をくり抜きます。その後、自然の矢竹の曲がりを実直ぐにしていいため、何度も「火入れ」を行います。火入れとは、矢竹を火であぶり柔らかくして、「ため木」という道具で曲がりを伸ばす作業です。火に入れすぎると堅くなり折れやすくなってしまいうため、ちょうど良いしなやかさを保つ熟練の技術が必要な工程です。通常の矢は年が経つと自然の状態に戻る力で曲がってしましますが、武夫さんが製作した矢は何年たっても曲がらない、と非常に評判が高いものです。

約2～3年がかりで製作される竹矢作りの最終工程で、^{ゆはず}弓筈、羽、矢尻をつけていくことになります。

「いろは竹工所」の竹矢製作については、特別展で詳しく紹介します。ご期待下さい。(大平 知香)

子守明神祭礼図

～江戸時代の挙母祭りを今に伝える～



写真①

豊田市郷土資料館では、「子守明神祭礼図」という絵巻を収蔵しています。縦30.4cm長さ676cmという長いもので、現在も10月第3土日に行われる挙母祭りの様子が描かれています。豊田市挙母町にある挙母神社は、もともと子守明神といました〔明治4年(1871)11月改称〕。

この絵巻では、神社境内に山車が並ぶ様子を描いた場面(写真①)にはじまり、挙母城内に山車が曳き込まれる場面など、現在の祭りとは違う情景が多く描かれています。少し絵巻を見てみましょう。

神社境内に並ぶ山車は5輦、描かれた幕の柄などから先頭は東町、2番目は中町、3番目は本町と思われていますが後ろ2輦は確定できません。東町の山車では、歌舞伎が演じられています。神社の境内には栈敷席が作られ大勢の見物人がいます。画面の手前には挙母藩の「下がり藤」紋の幕があり、槍も見えることから藩の関係者席でしょう。



写真②

続いて山車は、田んぼの中の道を通りお城へ向かい御殿坂を登ります。「挙母の町は七曲」、城へ行くのに7つ曲がり角を曲がったといわれる様子がわかります(写真②)。

そして山車は、大手門から挙母城内へ曳き入れられます。当時2万石の城にしては「過ぎたるもの」と歌われた大手門は、山車が通過できるように大きく造られたといえます。さらに絵巻は城内での様子を描いています。家紋を染めた幕を張った栈敷に座る重臣たちの前で、歌舞伎を披露。そしてさらに進んで藩主の前でも歌舞伎を披露しています(写真③)。

左端の隅櫓の位置から、この場所が御多聞前の広場であることがわかります。これらの場面で描かれている山車が南町、北町、神明町ですので、絵巻を通して8輦の山車が登場します。



写真③

この絵巻の最後には「呉山謹製」と署名があり、川上呉山が描いたといわれていますが、作者についての詳細は明らかではありません。見物人の服装、城内の様子などから江戸時代のものと推定されてきましたが、明治になってから、かつての情景を描いたとも考えられ、これまで江戸時代のものという確証はありませんでした。

しかし、平成25年(2013)3月に絵巻の修理をした際、巻物の芯となる軸部分に「天保十一子五月預り」と墨で書かれた文字が見つかりました。

「預り」とあるので制作年ではありませんが、これにより、この絵巻は天保11年(1840)にはあったことがわかりました。さらに挙母城が、洪水を逃れるため高台へ移転したのが天明5年(1785)であることから、その間の55年間に描かれた絵巻であるといえます。

この絵巻は関連する年号の記載が見つかったことで、挙母祭りの江戸時代の様子を今に伝える資料としても貴重なものであることが裏付けられたといえます。(伊藤 智子)



修理前の古い軸「天保十一子五月預り」とみえる

文化財シリーズ

85

国の特別天然記念物 カモシカ

カモシカは、哺乳綱ウシ目ウシ科ヤギ亜科カモシカ属に分類され、「シカ」という名称が入りますが、実はウシ科の動物です。

カモシカは、狩猟によって著しく減少したことにより、昭和9年(1934)に現行の「文化財保護法」の前身である「史蹟名勝天然記念物保存法」によって天然記念物に種指定され、その後新しく制定された「文化財保護法」に基づき、昭和30年(1955)に特別天然記念物に指定されました。

カモシカの特徴は、雄・雌共に10数cmの角をもち、体長は1m20cm程度になり、毛衣は灰色や灰褐色で、本州・四国・九州に生息していると言われています。

食べ物は植物であり、木の葉や芽、広葉草本などを食べます。また5月～6月にかけて出産

し、ほぼ1歳になるまで母親に追従します。

豊田市では、山間部で見かけることがあり、場合によっては民家近くまで出没します。生きているカモシカや老衰したカモシカであっても、野生の回復をめざし、保護捕獲は行っていません。原則として見守っていただくことをお願いしていますが、住民の方に危害が及ぶ恐れがある場合や死んでいるカモシカを発見したときには、豊田市教育委員会文化財課までご連絡をお願いします。



カモシカ

資料館NEWS

～夏休みに終了したイベント・講座の報告～

今年の夏はいかがお過ごしでしたか。毎年、豊田市郷土資料館では、夏休み期間に合わせて、講座やクイズラリー、ワークショップなどを行っています。今年は次のような催物を開催し、たくさんの方にご参加いただきました。

イベント「夏休みこども月間」期間7/13(土)～9/1(日)

内容：火起こし体験、クイズラリー、ワークショップを企画し、こどもたちが郷土の歴史や文化について楽しく学べる体験を毎日開催しました。

講座「縄文時代の布作り」7/24(水)開催

内容：縄文時代と同じ方法で、カラムシという植物の繊維を編んで布を作る体験を開催しました。

講座「弥生時代の布作り」7/24(水)開催

内容：弥生時代と同じような原始的な方法で、織物作りを体験する講座を開催しました。

講座「まが玉作り」7/25(木)・7/26(金)・7/30(火)の各日午前・午後、計6回実施

内容：豊田市内から出土した古墳時代の「まが玉」を観察し、滑石という石材で「まが玉」を作りました。

講座「親子史跡めぐり」8/8(木)開催

内容：豊田市内の遺跡・文化財を、文化財課の解説付きで回るバスツアーを開催しました。



伊勢神峠まで登って皆でピース！
旧飯田街道沿いの峠の山道を歩きました。

冬休みや春休み期間もいろいろなイベント・講座を企画します。ご期待下さい！

利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.85■

平成25年9月26日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。